

石川 亮

滋賀県 大津市

いつもの家／どこ屋

紀伊半島の先端、潮岬に漂着した流木で制作された小屋・祠。四尺（1200 mm）角の立方体にすっぽりに入る大きさは、人が入るには小さく、小動物では大きい微妙な寸法であり、「何かが宿る、籠る空間」になっている。

小屋の入口部は鍵穴だけが空いており、容易に出入りすることができない。鍵穴に流木で制作された把手（とて）を差し込むことで、入口を開けることができる。串本町立出雲（いつも）小学校の全児童はその把手を所持している。児童は自分の手に馴染む大きさの流木を探し出し、程よい大きさに切り、削り、磨き上げ、自分の専用の把手を制作している。（ワークショップにて制作）更に革製の紐をとおして吊り下げるができるよう施されている。

この潮岬でつくれた小屋は特定の場に居座る事なく、あちこちを漂い、移動し続ける存在でありたいと願っている。

流木がいつもどこかで漂っているように・・・



森の七からVII

木木
へ行こう

作品公開 2014/9/22(月) - 9/28(日)

二人のアーティストが串本町潮岬における一ヶ月の公開制作を経て、制作された作品を発表します。

写真は公開制作途中のものです。

林 憲昭

和歌山県 串本町

明神ハウス / 影見

白い小屋の中に、小さな鏡の家が入っています。小屋の中には、吉座川町立明神小学校での、万華鏡を用いたワークショップで集めた「古座川の色」が張られ、小さな鏡の家にその色が映り込みます。白い小屋は、小さな鏡の家を納める社であり、明神小学校の生徒たちが集めた「古座川の色」を持ち運ぶ器でもあります。

作品は、明神という土地の名前から、神様の化身 = 鏡という発想で作されました。鏡は様々なものを映すという性質ゆえ、昔から神聖なものとしてとらえられてきました。鏡がご神体の象徴として神社などでも祭られています。つまり真っ正面から神様にお願いごとをするときは、それは自分自身に向かって手を合わせているということでもあります。鏡に映るすべて、そう、この世界すべてを映し、すべてを映すゆえに透明になる「明神ハウス・影見」はそんなイメージの作品です。

森へ行こう

森のちからVII

2人の作家（林憲昭、石川亮）が、同じサイズの小屋を共通のフォーマットとし、それぞれが串本町、古座川町の豊かな自然や環境、人などから得たインスピレーションをもとに作品を制作します。作品は公開制作や出雲小学校、明神小学校でのワークショップを通じて制作され、期間内で次第に形を現していきます。

小屋は、120cm 立方に収まるくらいのサイズで軽トラックの荷台に載せ移動することができます。小屋は作品であり、移動する小さな美術館であるとも言えます。森から海へ、海から森へと移動する二つの作品が最後は、豊かな森の恵みが出会うように、本州最南端の海を眺める丘で出会います。

artists

林 憲昭 はやし のりあき

1970年 岐阜県生まれ
1993年 東京芸術大学絵画科卒業
2009年より和歌山県、串本町在住

日光写真（サイアノタイプ）による作品を、2002年よりメキシコで制作はじめ、制作する場所の光・空気・水などを用い、青色の世界に浮かぶ微細な光をテーマに作品を制作している。その後、スペインを経て、様々な縁で熊野地方に居をかまえる。微細な光というテーマの内容はその時々の視点の中で変化し、現在は子供の元気（光）を布に焼き付ける「げんき海プロジェクト」なども手がけ、自然の中での小さな生命の光をテーマに作品を表現している。

石川 亮 いしかわ りょう

1971年 大阪生まれ
1995年 京都精華大学美術学部卒業
1996年より滋賀県大津市在住
現在、成安造形大学附属近江学研究所研究員

交通インフラやそのシステムの興味から作品制作を始める。近年は国内の神仏にゆかりのある地に出向き、その場所の持つ性質やルーツを探ることが作品制作の糸口になっている。近作に地域伝承や地名をもとに名付けられた湧水を収集した作品「全体 - 水」は個々の水が混ざりあい一つになるプロセスを作品にしている。宗教観と自然観を生活の中に取り込み、自然と対峙しながらも共存してきた日本人の感覚に注目している。

開催場所 串本町、古座川町周辺（地図参照）

実施期間：2014年9月22日（月）～28日（日）

作品公開展示

●「いつもの家 / どこ屋」（石川 亮）

9月22日（月）～26日（金）② 串本町立出雲小学校

●「明神ハウス / 影見」（林 憲昭）

9月22日（月）～26日（金）① 古座川町中央公民館ロビー

●「いつもの家 / どこ屋」「明神ハウス / 影見」

9月28日（日）⑤ 潮岬望楼の芝

※ 28日（日）には二人の作家による作品紹介ツアーがあります。
13:00 潮岬望楼の芝に集合（気象状況によっては中止の場合もあります）

尚、作品は公開展示後それぞれの場所に帰ります。

●石川 亮 作品「いつもの家 / どこ屋」 ② 串本町立出雲小学校

●林 憲昭 作品「明神ハウス / 影見」 ④ 古座川町立明神小学校

① 潮岬青少年の家 キャンプサイト周辺

★作品：石川 亮 / 林 憲昭 9/22～9/28

② 串本町立出雲小学校

★作品：石川 亮 9/22～9/26、9/29 以降

③ 古座川町中央公民館

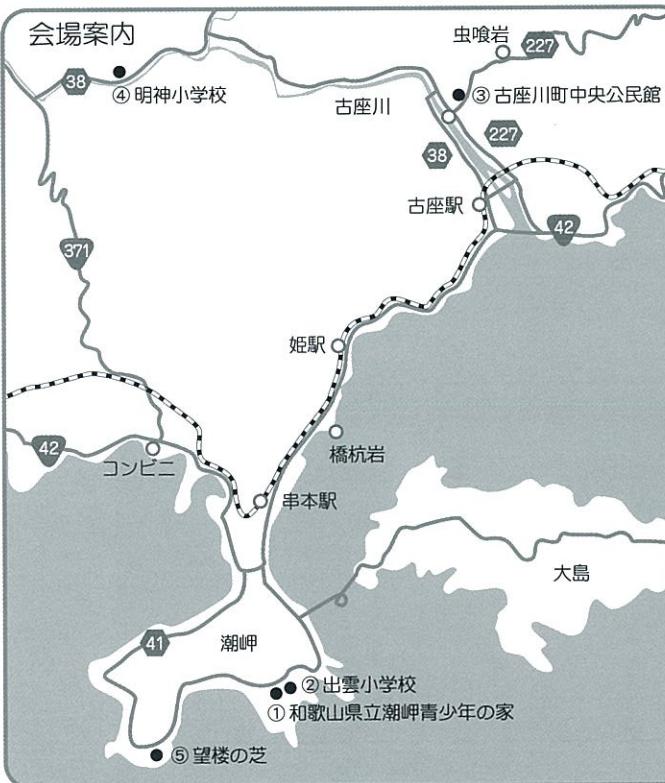
★作品：林 憲昭 9/22～9/26

④ 古座川町立明神小学校

★作品：林 憲昭 9/29 以降

④ 望楼の芝

★作品：石川 亮 / 林 憲昭 9/28のみ



和歌山県立潮岬青少年の家

〒649-3502

和歌山県東牟婁郡串本町潮岬 669 TEL:0735-62-6045 FAX:0735-62-0182

access

●電車の場合 JR紀勢本線 串本駅下車 バスタクシー利用（タクシー約10分）

●自動車の場合 阪和自動車道 南紀田辺インターチェンジから約75km。※駐車場有

ゲスト・水野雅弘

一般社団法人グリーンエデュケーション代表理事

鎌倉と熊野を拠点としたノマド的ワークスタイルを実施。Green TV の日本代表を務め、紀州熊野の自然資本価値を世界に配信している。また自然体験や五感を通じた新しい教育方法を通じ、持続可能な地域デザインと人づくりにも取り組んでいる。

進行・奥村泰彦

和歌山県立近代美術館教育普及課長

京都市生まれ。同志社大学大学院博士前期課程修了。1989 年から和歌山県立近代美術館学芸員として、新館の建築や展覧会の企画などに携わる。関西を中心とした戦後美術や川口軌外らを紹介する展覧会を実施している。

主催：特定非営利活動法人和歌山芸術文化支援協会（wacss）

後援：串本町教育委員会 古座川町教育委員会

助成：平成 26 年度紀の国森づくり基金活用事業

協力：air 和歌山実現委員会 和歌山県立近代美術館 特定非営利活動法人潮岬あもしろらんど体験学習推進協議会 古座川町・串本町のみなさま EU・ジャパンフェスト 日本委員会 串本町立出雲小学校 古座川町立明神小学校

お問い合わせ

特定非営利活動法人和歌山芸術文化支援協会（wacss）

〒640-8462 和歌山市粟 427-1 地産マンション紀ノ川 602
tel/fax 073-454-5858

e-mail: office@wacss.org http://www.wacss.org/

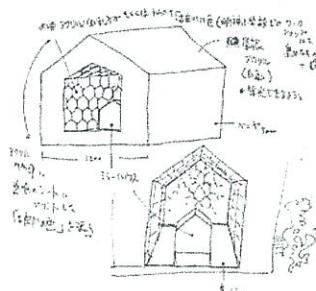
林 憲昭 はやし のりあき

1970 年 岐阜県生まれ

1993 年 東京芸術大学絵画科卒業

2009 年より和歌山県、串本町在住

日光写真（サイアノタイプ）による作品を、2002 年よりメキシコで制作はじめ、制作する場所の光・空気・水などを用い、青色の世界に浮かぶ微細な光をテーマに作品を制作している。その後、スペインを経て、様々な縁で熊野地方に居をかまえる。微細な光というテーマの内容はその時々の視点の中で変化し、現在は子供の元気（光）を布に焼き付ける「けんき海プロジェクト」なども手がけ、自然の中での小さな生命の光をテーマに作品を表現している。



明神ハウス / 影見

白い小屋の中に、小さな鏡の家が入っています。小屋の中には、古座川町立明神小学校での、万華鏡を用いたワークショップで集めた「古座川の色」が張られ、小さな鏡の家にその色が映り込みます。白い小屋は、小さな鏡の家を納める社であり、明神小学校の生徒たちが集めた「古座川の色」を持ち運ぶ器でもあります。

作品は、明神という土地の名前から、神様の化身 = 鏡という発想で作されました。鏡は様々なものを映すという性質ゆえ、昔から神聖なものとしてとらえられてきました。鏡がご神体の象徴として神社などでも祭られています。つまり真っ正面から神様にお願いごとをするときには、それは自分自身に向かって手を合わせているということでもあります。鏡に映るすべて、そう、この世界すべてを映し、すべてを映すゆえに透明になる「明神ハウス・影見」はそんなイメージの作品です。

石川 亮 いしかわ りょう

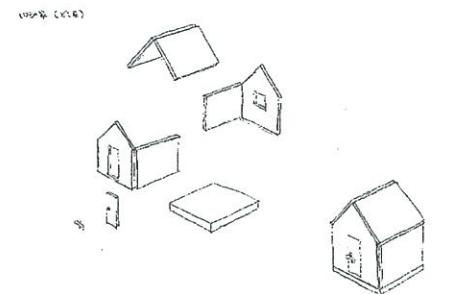
1971 年 大阪生まれ

1995 年 京都精華大学美術学部卒業

1996 年より滋賀県大津市在住

現在、成安造形大学附属近江学研究所研究員

交通インフラやそのシステムの興味から作品制作を始める。近年は国内の神仏にゆかりのある地に出向き、その場所の持つ性質やルーツを探ることが作品制作の糸口になっている。近作に地域伝承や地名をもとに名付けられた湧水を収集した作品「全体 - 水」は個々の水が混ざりあいつになるプロセスを作品にしている。宗教観と自然観を生活の中に取り込み、自然と対峙しながらも共存してきた日本人の感覚に注目している。



いつもの家／どこ屋

紀伊半島の先端、潮岬に漂着した流木で制作された小屋。祠。四尺(1200 mm)角の立方体にすっぽりに入る大きさは、人が入るには小さく、小動物では大きい微妙な寸法であり、「何かが宿る、籠る空間」になっている。

小屋の入口部は鍵穴だけが空いており、容易に出入りすることができない。鍵穴に流木で制作された把手(とて)を差し込むことで、入口を開くことができる。串本町立出雲（いつも）小学校の全児童はその把手を所持している。児童は自分の手に馴染む大きさの流木を探し出し、程よい大きさに切り、削り、磨き上げ、自分の専用の把手を制作している。（ワークショップにて制作）更に革製の紐をとおして吊り下げるができるよう施されている。

この潮岬でつくられた小屋は特定の場に居座る事なく、あちらこちらを漂い、移動し続ける存在でありたいと願っている。

流木がいつもどこかで漂っているように。。。

森のちからVI

森 木 へ 行 こ う

アーティスト・トーク 森を語る

出席

水野雅弘（一般社団法人グリーンエデュケーション代表理事）

林憲昭（美術家）

石川亮（美術家）

井上節子（特定非営利活動法人 和歌山芸術文化支援協会理事長）

奥村泰彦（和歌山県立近代美術館教育普及課長）

2014（平成26）年9月20日
18時30分～20時（90分）

森のちから

和歌山県紀の国森づくり基金活用事業で実施する「森のちから」は、歴史と文化を育んできた熊野の豊かな森に芸術家を招き、現地制作によって新しい視点から森の魅力を発見し、県内外から招いた人々と地元の住民との交流を通して、熊野の森のすばらしさを発信していくことを目的とした事業です。

平成19年度から5回にわたって田辺市中辺路町近露、平成25年度は串本町にて実施してきた本事業には、これまで12名のアーティストが参加し、森の恵みから創造力を得て、新しい視点からの眺めを示してくれました。第3回まではアーティストを公募しましたが、応募者は国内外から延べ71名にのぼり、人々を惹きつける熊野の森の魅力を改めて認識できました。その滞在制作を通して地元住民や熊野を訪れる県内外の多くの人たちに、普段見ている景色が違う見え方となる新しい発見、森から発想する力を学び、より魅力に富んだ森との出会いの場を地元の方々と共に生みだしました。

第7回となる今回は、アーティスト林憲昭氏（串本町在住）を中心に、招聘アーティスト石川亮氏（滋賀県在住）の参加を得て、熊野の森の素晴らしい可能性を更により多くのひとたちへ繋げるため、新しい創作活動に挑みました。また、「森を語る」場をつくり、アーティストとともに森の未来、ふるさとの自然を考えて行きます。

豊かな自然は、一方で厳しい災害をもたらすものでもありました。3年前の台風12号による紀伊半島大水害からの復興の途上にある南紀で、アーティストたちの制作を通して自然を見つめ、ふるさとの森が県民の文化的財産として、より多くの人々に伝わり、未来を担う子どもたちに引き継がれていくことを目指します。

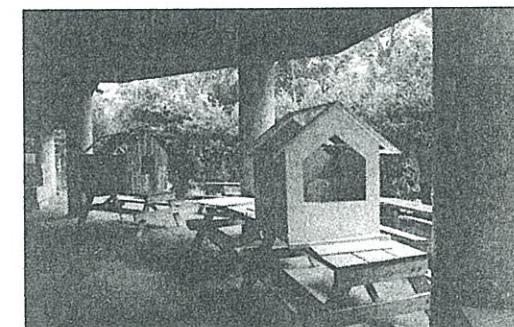
特定非営利活動法人 和歌山芸術文化支援協会理事長
井上節子



出雲小学校ワークショップ（石川）2014/9/8、9/18



明神小学校ワークショップ（林）2014/9/11



公開制作 潮岬青少年の家にて